瀧川西岸一覽

上り船之部

上

曉晴翁著
松川半山画

淀川両岸一覽

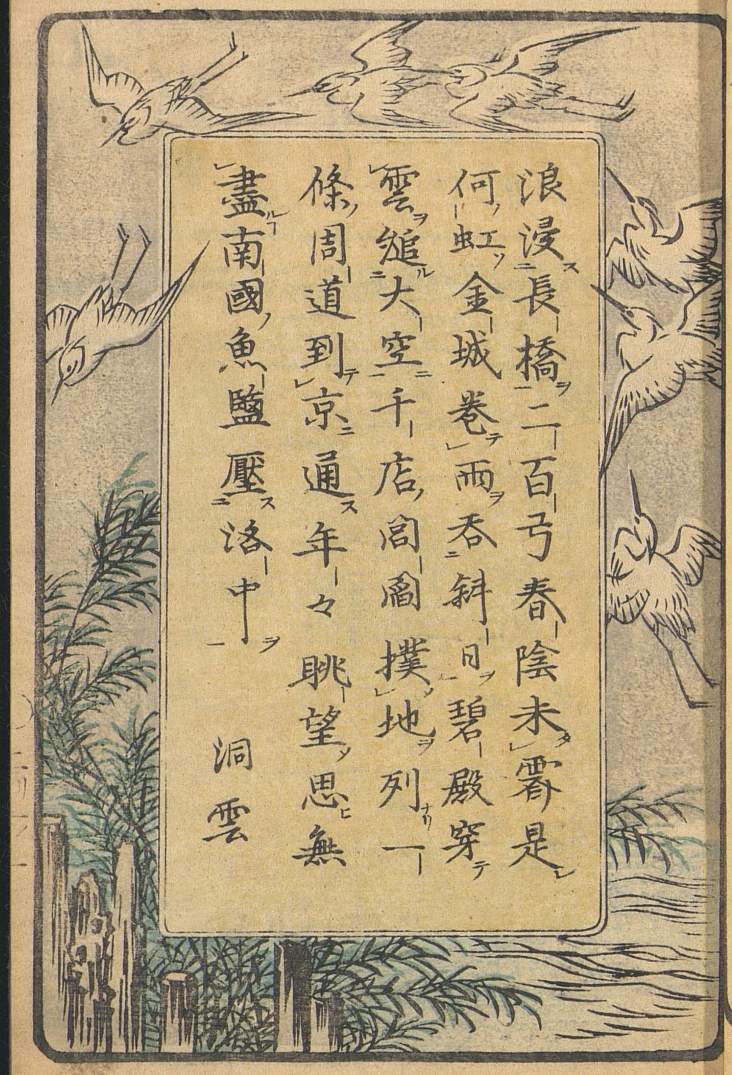
上船之巻

二冊

余每遊浪花必買船六艘水。
哇撥江山之勝未暇探沿江諸
區也須日鷄鳴舍主人被示此
著偶又趁浪華携而乃。
舟中披閲之間百里長堤

邨落祠觀名區舊墟目迎
而送之〻詳悉情長流〻
將畫史留家及謝而還之自
今及下瀝於人〻必携一本莫
主人〻賜為多也因慫慂刻
之若夫賈人佔密必便泊航
迢〻江水數寫夢於嗟來賣
食聲一回勿論也
安政丙辰三月飄〻亡人題

應需李陽書



浪浸長橋二百弓春陰未霽是何虹金城卷西呑斜日碧殿穿雲縋大空千店宮商撲地列一條周道到京通年々眺望思無盡南國魚鹽壓洛中

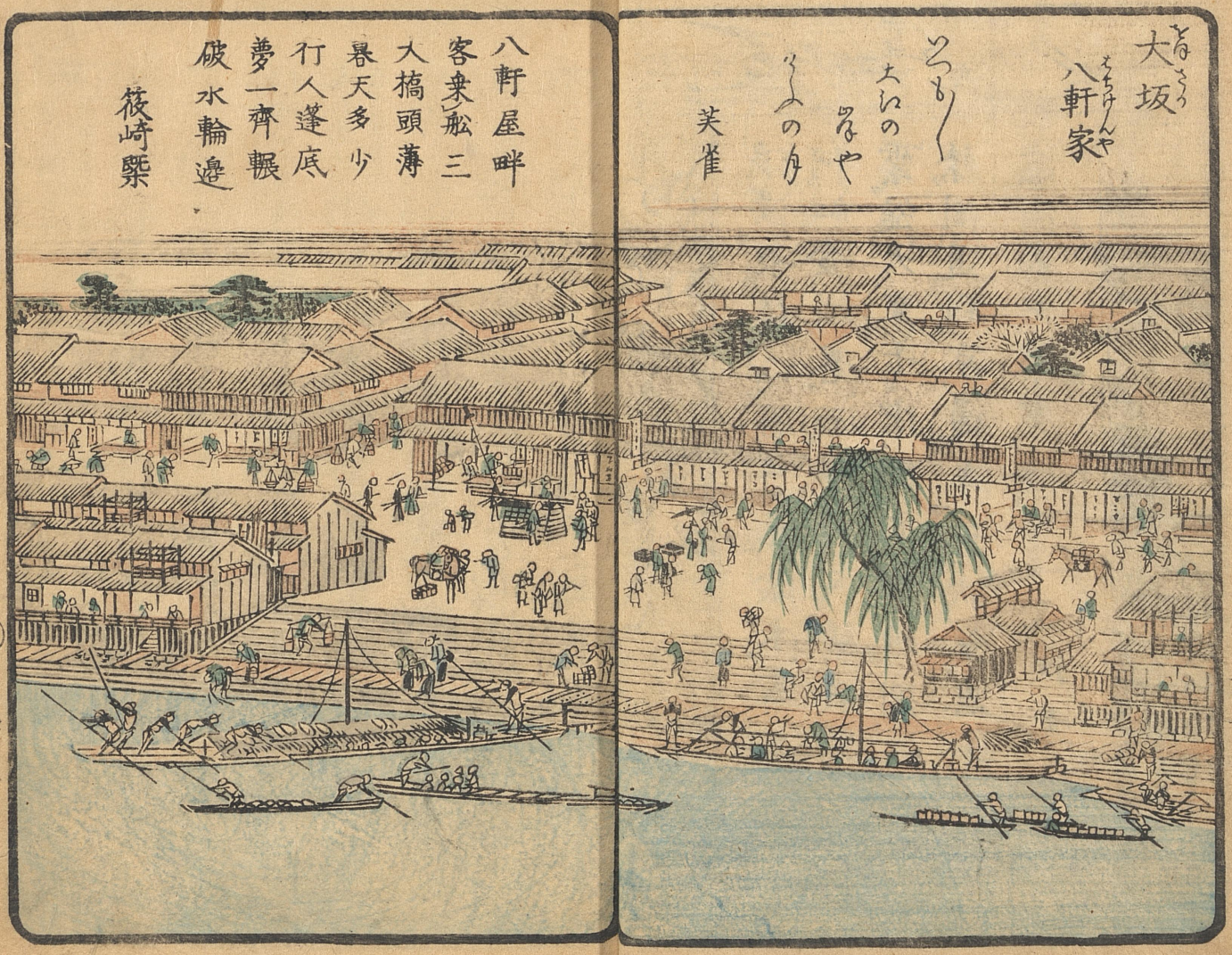
洞雲

凡例

一 此書ハ浪花より京師へ舩ゐ登る淀川條の両岸の地名と和名を傳る寺社及び名所古跡を著し且其風景絶佳なる所々の客と出し舩客の風とする者と両岸を一圖ようさん更級さよ衣ゆくべとゝゞも其委おいくしべ又左よ新舩ありく右よ鄙の狹き地あり右よ美景ありく左よ川添の堤のゝ有て其畠風流なるゝ所なり舩中より見るゝ右と畠ゝ其順よ一覽せしむされバ前の二巻ハ上舩の右と

一 うゝ後の二巻ハ下舩の右と更く故よ上舩の巻ゝ下舩の左より下舩の巻ハ上舩の左に心得べし文も又准之

一 舩客ゝれと図しゝべ舩長よ問べて両岸と委く知べし



大坂
八軒家

芙雀

八軒屋畔
客乗船三
大槁頭薄
暮天多少
行人蓬底
夢一齊輾
破水輪邊

筱崎槩

大坂　難波津といふ浦海浮江里とハ難波人難波男難波女の古稱なり
又浪速國浪華ハ神武帝の御宇よりの古名なり

大坂とハ號上古より聞えたるハ大江坂の畧訓なるべし
とハ説のまさしからんか大江ハ難波江の一名にて人王十七代
仁德天皇第一の皇子と大江伊耶本和氣命と申す　支禪の後ハ
履中天皇と
称す則十八代の帝なり　此時大江の号初て聞ゆ抑當津ハ海陸の都會天下の
要衝にして西州の喉口　皇州の圉域なり群峯右に繞り平野左に
連る澱水ハ内に貫き江海外に抱く山川の明麗田野の壤腴海
濱の廣斥澤國の佳致にて他邦に類なき故に諸國の米穀材
石及び和漢の雜貨ものに着船して朝の市暮の市街に囂
〳〵縱横四衢の賑しき事海内に冠たり

難波橋　浪花三大橋の一なり南詰ハ船場北濱より北詰ハ西天滿に架せり
長さ百十四間六尺欄檻天弓のごとく連りもっぱら壯觀なり

山州淀河の下流浪華に入天滿川と号し當橋の下より中の島と
分遶して北と裏川とのひ南と土佐堀とハ世俗倶に大河と呼ぶ
中の島の東の寄と山崎の端と号し此所より東方の瞻望佳景と
風流の貨食家富家の隱居所などありて無雙勝地なり夏夕ハ
納涼の遊船水面に充滿して橋上の往来両岸の茶店繁しき事

言も尽し難し獅子堂云橋は百丈にして水面に流れ日は金城の上に出て影孤舟と沉む趣は此所と浪花第一の美景とも云

長き夜も明ぬ難波ぶり　獅子堂

金相場濱　難波橋の南詰東の方北濱一丁目より　浪花市中の両替屋日毎に多く集り

金の賣買とす　相庭と立て金の價を定む浪花の一奇なり

築地　金相場の東の方　此地は僅の地所なれども旅宿貨食家貸座敷など

蟹島ともいふ　天明三卯年堀地あらため今のやくにまかりてまことの繁昌の地となれり

にぎわれども清らかなる風流なり

東堀　築地の端より天河を引て南に流れ天正十三年開鑿ありし東横堀より築地より此堀を架せる橋を鼓屋橋といふ東北を京橋六丁目とも

天神橋　難波橋の上の方川上より第二の大橋なり長さ百二十二間三尺高欄麗敷

仕様なり南詰は京橋六丁目北詰は東天満十丁目とも

當橋の通は北は十丁目條より長柄に通ず京師に登る西街道なり

至て南は松屋町通より下寺町に至る道條なれども都鄙の行人

往返引もきらず恰も櫛の齒とひくが如し殊更北詰は青物の

市場にして朝毎の群集雲霞のごとく甚賑ひ言語に絶て天満宮

参詣の通路なるが故に斯いふなるべし

八軒家　天神橋南詰の東の方京師上下の船着にて旅宿のことを連ね

昼夜にぎわしく繁昌古名と十日宿なり八坂古図に見へたり

京師への通船は浪花市中所々に有とへども當舳岸と第一とに所謂三十石の登船夜船今井船は東雲の頃より纜を解く伏見より着岸の早きと誉とにさる程より夜舟の下を速さは秋の内より着今井船の一番は未明より發し夫より二番登舟夜船の上を終船は凡亥の刻より及べり又登船の下りの遅きも和更を過ぎてはれば其間静かなること僅より二時より過ぎ頗る繁花の地なり傳云此地は古歌より渡辺や大江の岸と詠ぜし名所なりとぞ　委しく摂津名所圖會大成より出せばこゝに畧す

秋の夜ふけぬ大江の岸もまぶそうしく　茶夕

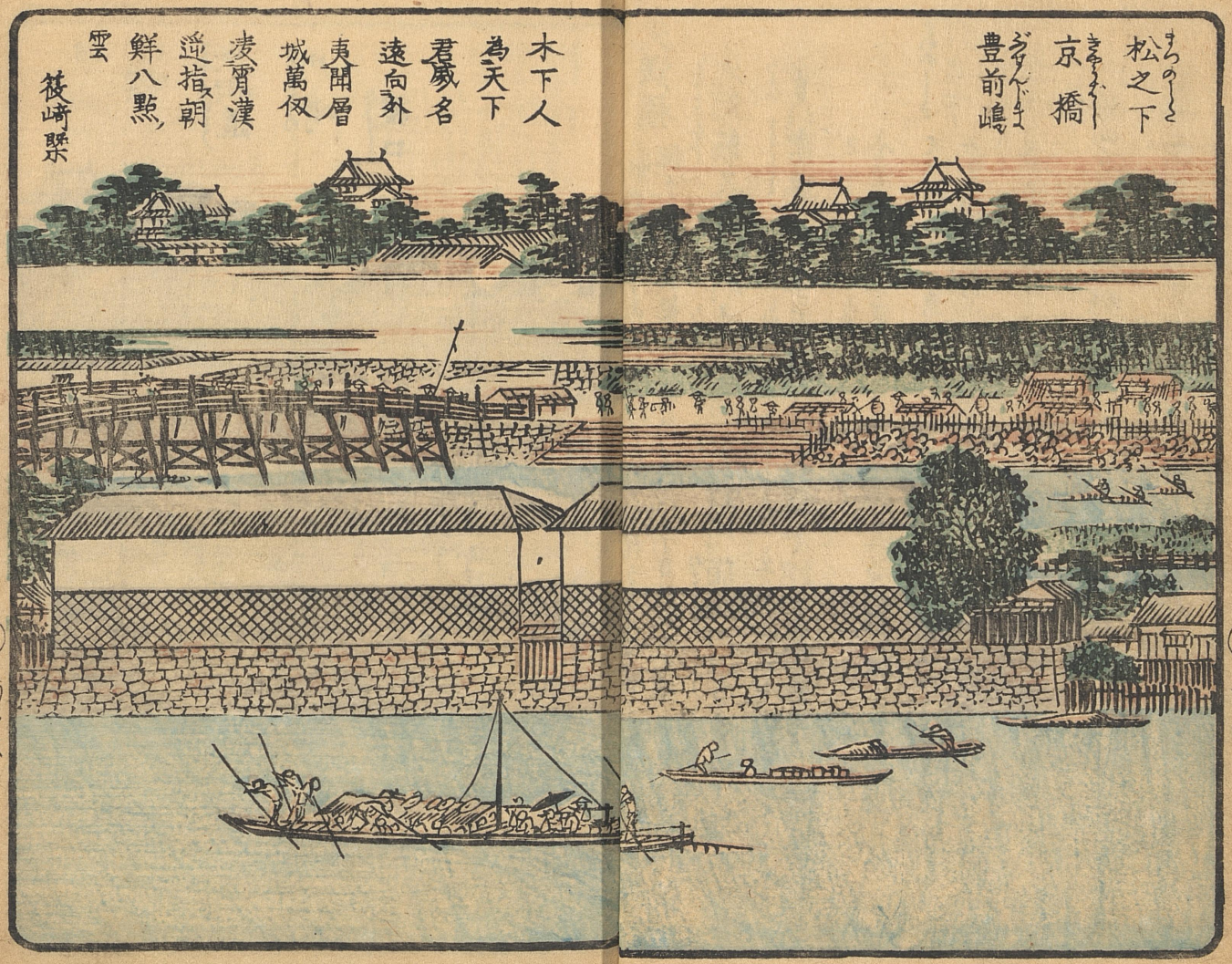
天満橋　八軒家の東にあり川上第一番の大橋なり長さ百十五間五尺高欄魏々として壮観なり南詰は京橋二丁目北詰は天満二丁目と云

大河筋又鯰江川古大和川平野川猫間川等合流してこゝに會し當橋なり天神橋難波橋と以て浪花の三大橋と称す

今宵満つ天のうしを踏まうぬ　淡々

松之下　天満橋南詰の東にあり一町余の間土堤に並木の松あり故に名とす　此辺に新の左神の小道具店茶店餅菓子酒煮賣ホの料茶屋なり

此地は原京橋一丁目と号して人家建つらねて享保八年所習ありて道頓堀吉左衛門町の裏手へ移されより今の如く明地となれり吉左衛門町の後方と本京橋町と号せし此謂なり


松之下
京橋
豊前嶋
木下人
為天下
君威名
遠向外
夷開層
城萬仞
凌霄漢
遥指朝
鮮八點
雲
筱崎縣

其二

尼町

京街道

川崎

渡口

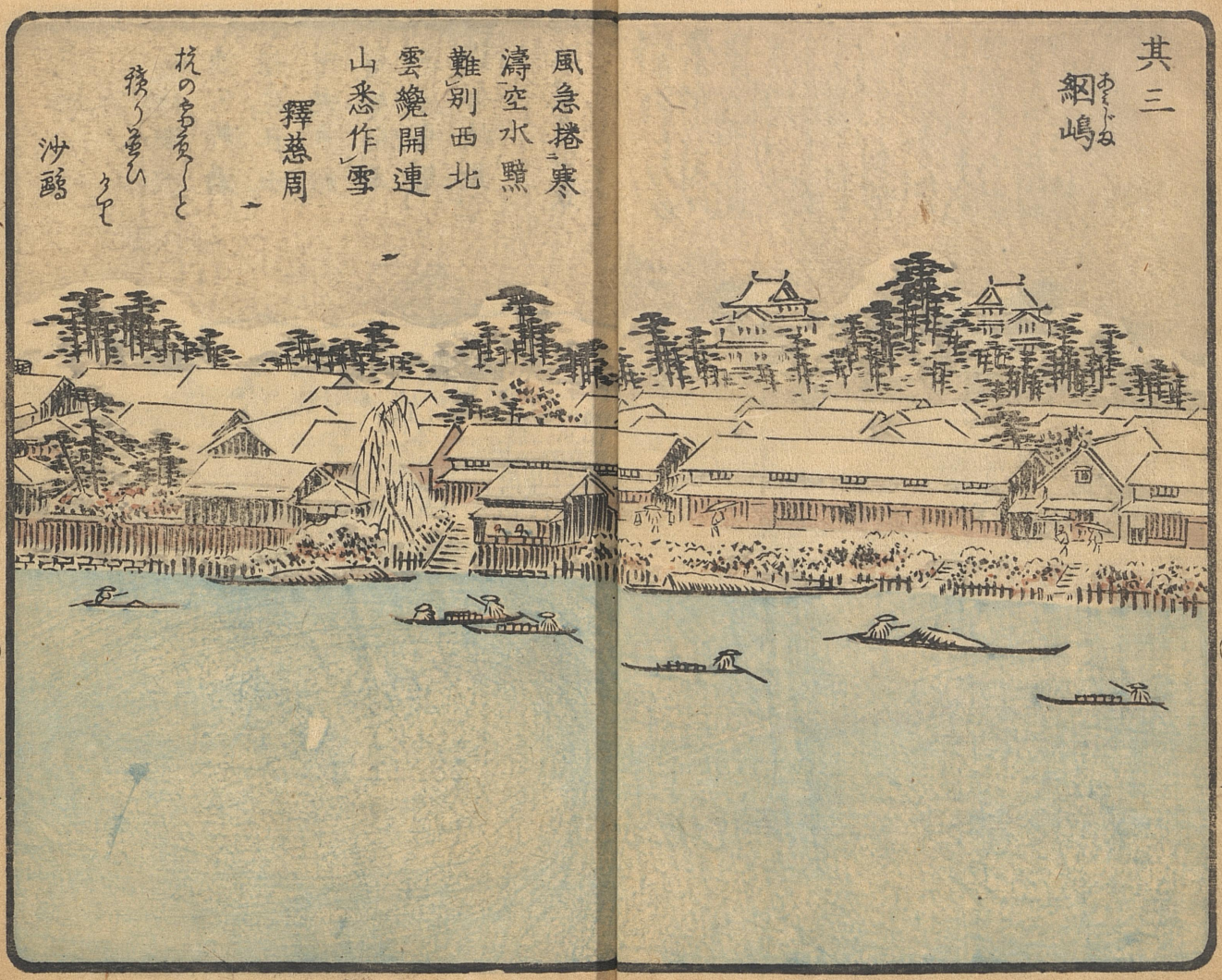
其三

網嶋

風急捲寒
濤空水黯
難別西北
雲纔開連
山悉作雪

釋慈周

抗の高々〜と
猪〜重ひ
沙鷗



其四

城北網洲
漁父郷酒
樓宛在水
中央魚膾
蟹螯知不
乏妓舟維
得柳絲長

荒井公廉

京橋 松の下の東にあり北詰と相生西之町と云 俗に庁町といふ京街道の喉口なり 故大和川猫間川會流して
橋下を歴て大河に入欄檻葱宝珠の銘に云元和九年造立云云
南方ハ金城巍々赫々として松風萬歳を唱ふ北詰にハ朝毎に
川魚の市ありて鱗鬣販きし此市場に清泉ありて常に涌出し
四面に溢る衆人數愛翫し此より東に至れバ野田橋を越野田町を
歴て野江村に出る則京師往還の本街道なり

備前島橋 京橋の北にあり鯰江川に跨る南詰ハ庁町北詰ハ備前島町といふ
此橋辺に過書の船番所あり八軒家より是迄水上九三町許

川崎渡口 右同所にあり此西岸より天満の川崎にわたる舟渡しにして渡凡八十四間余と云
是より以下渡しと号するものハいづれも舟渡しにして淀川を横ぎるなるべし

綱嶋 備前島の東につゞく 網干町といふ 此地ハ淀川の側なるゆへ前ハ淀川の流れ潔く
浪花の通船釣船網舟遊楽の樓船終日往来し東ハ河内大和の
山々見えわたりて瞻望いとふ絶景なりさる程に富家の別宅雅人
の閑居風流の貨食家等ありて頗る遊楽の雅地なり原来此辺ハ
漁家多く常に軒端に網を干ほしよりして網嶋と号けしなるべし

大長寺 右同所にあり浄土宗京師黒谷に属す 本尊阿弥陀佛ハ恵心僧都の作なり境内に鯉墳
碑に刻す 滝登鯉山とあり 委く鯉鱗の奇なるもの有寺の什物とす 縁起あり是より 畧之
北へ堤づたひ凡三町ばかりにして櫻宮に至る左右櫻多し

櫻宮 細島の北にあり 所祭天照皇太神にて宮づくりの光景伊勢と換せり 例祭九月廿日

當社は淀河の東岸にあり境内は言に更なり水辺より馬場の堤に至るまで一帯の櫻にて晩春の花の盛は雲と見雪と疑ふ

風景なり又西の河岸は川巾なり北にづらして長柄の里の遠

まぐ此も列木なれば川と接し両岸の花爛漫として水に

映し川風花香を送りて四方に芳しきを程なく都下の老若

陸と歩し船に通ひ訛ふあり舞ひ歌ひ紅日西に没するを知

らず浪花に於ける遊宴の最上花見の勝地といへべし

櫻之渡口 川巾の渡口なり 此渡船は弥生の花のひのく有て老は行べ

故に糯のもちと号く

源八渡口 右の渡口の上に有 西成郡天満源八町より東生郡中野村へ

舟渡しなる中野の渡口なり云渡の長さ九十間と云

源八ともうつる梅のいろ〳〵 蕪村

○中野 右の渡口の一村なり列樓の宮は當村の内にて生土神なり

當村の農家は酒肴を販ぐ

あり其塩梅鄙に似べく遊客をも賞翫就中泥鰌汁を

以て名物とせり花の比より始て初夏中旬を限とす

○澤上江 中野村の上にあり當村の五六町東に鶴墳といふあり甚幸実詳なべ

疑ふらく〳〵高貴の人と葬せし塚なるべし

川崎
櫻宮
正格
翠翁

其二

横宮の西岸へ
天満の川岸より
登舟の水主ホ
ろう上陸し木村堤と
長柄の三頭まて凡一里の
間にのぞり夫より船ホ
のりて東堤へよりる

真柳

川くまく
のぞり船

庭く船と橋る
柳や
のぞり船

西柳亭

毛馬

第二度目武西より
上船の水子ホ上りく
赤川まで廿丁のろ
のぼり来りて船のり
西境より七番の
二番より上りてさと
境と平田の番所の
家と通り行きて九
一里金とりて行川と
流るるふふのり

上り多領堰とれ上り
柱かと打てこ[illegible]まで
九二里行ぬりて見より
あさの十町ばかりを
よりて本堤へよる

武辺にて保泊
ぶんぐの書ろあ
つきて船宿を
これとすむ

母恩寺 浄土江村にあり法皇山と号ス 本尊阿弥陀佛立像長三尺許惠心
浄土宗にして女僧住職を
僧都の作と聞也當寺の尼僧常に綿帽子を製るを生業とす
其色清白にして美を好ミ此地名物と世に名高し

○善源寺 浄土江村の上にあり此寺院にして今の村名となる
善源寺村とよべり

○友渕 善源寺村の上にあり或ハ舳渕とも書ク

毛馬渡口 友渕村の上にあり東生郡毛馬村より西成郡北長柄村への舟渡
渡の長さ百九十間と云

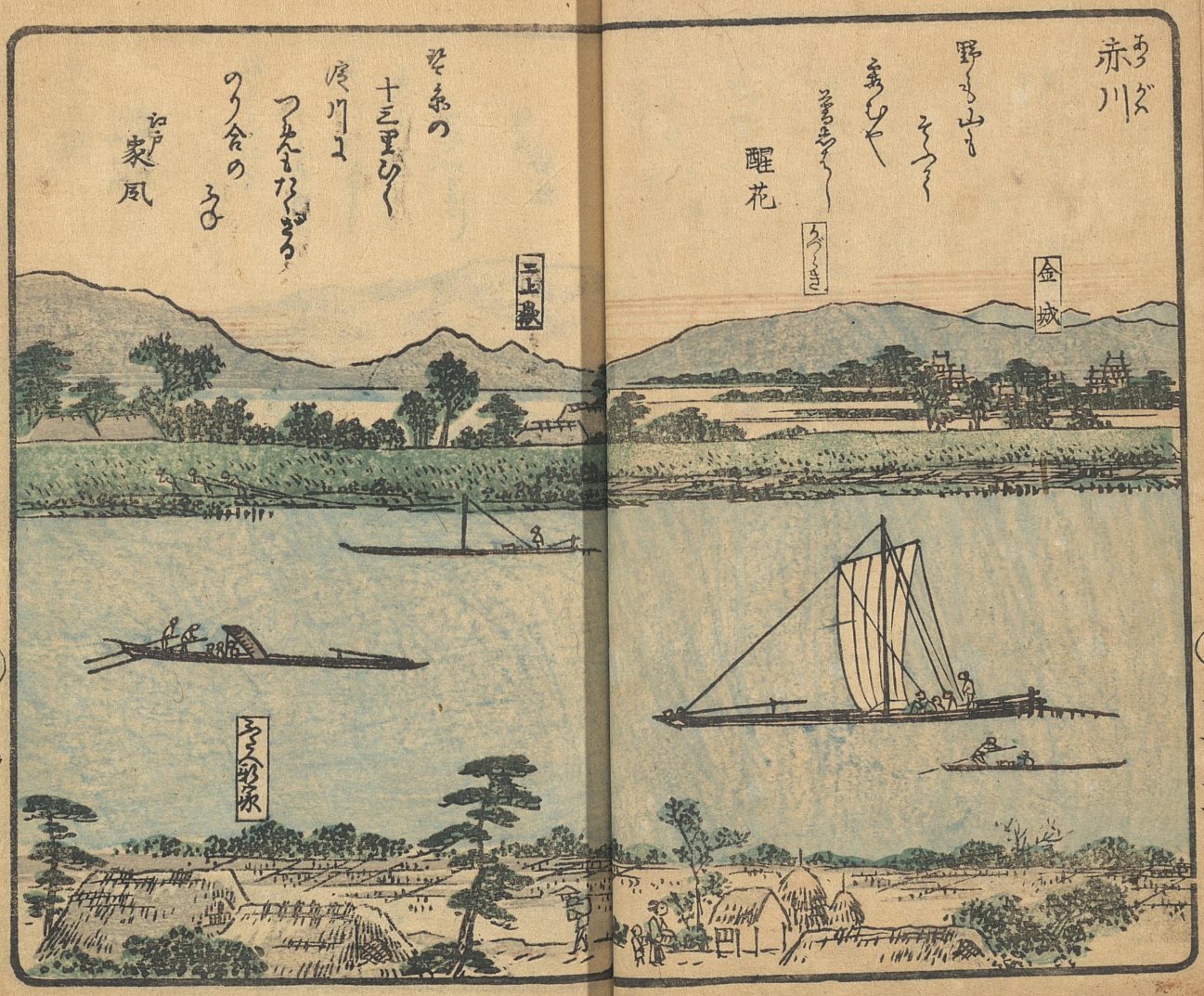
○毛馬 右後協の上にあり備前島より此所に者賣船あり酒餐にふと
此所にて水上九三十町余

○赤川 毛馬村の上にあり此辺より上と出ル世る赤川土と名ずる
一比社元に名ずるにて今の後にあり惜しむべし

○菘生 赤川村の上にあり ○上之辻 菘生村の上にあり ○中村 上の辻村の上にあり

○江野 中村の上にあり ○南島 江野村の上にあり ○森小路 南島村の上にあり

陸路街道 大坂野田町より野江関目茶屋を経て南嶋と森小路の間に
出る是より森小路今市土居守口を経て南十番。八番。七番。五番。
二番。一番 佐太にて是より仁和寺。點野太間。木屋。松ヶ鼻。出口。伊加賀。
投方。禁野。礒嶋。渚。下嶋。上嶋。樋之上。楠葉。橋本 樋之上
美豆。淀 大橋 間小橋 小橋を越て淀堤五十町 下三栖より伏見肥後橋に至る本街道と


赤川
金城
醒花
三上嶽
江戸 象風

守口驛

新川

船をあれと
よくの堀
うくひとなきり
鬼うれく
うちゆきし

對式 勝任

鬼瓦
秋の夜ふの
笛とあしく
ひまとり
ちにわたり

百人

京ニ入或ハ竹田街道ヲ上ルモ又淀ヨリ富士横大路下上の鳥羽ヲ経て東寺四塚ニ出るもいろいろの〳〵其方角の便宜ニ志たがへ

今市渡口　茨小路村の上ヨリ東生郡今市村

○今市　渡場の一村ヨリ毛馬ヨリ此所まて水上九十丁半余

攝河之國境　今市村土居村の間ヨリ是迄ハ攝州東成郡ヨリ茨田郡ヨリ

○土居　今市村の上ヨリ　猿嶋　土居守口の間三ツ島ヨリ

旧名竹門紀ヨリ　土人中の洲ヨリ

守口驛　土居村の上ヨリ　是ヨリ岸ヨリ負へ　浪華ヨリ京師ニ上る陸路の官道第一の驛

ヨリ高麗橋ヨリ此地ニ至る行程二里　歴ヨリ　片町　野町　野江　内代　関目　茨小路　今市　土居　守口ヨリ

是ハ本街道ヨリ　ヨリ程ニ傳舍軒とゝ〳〵飯盛の女昼の支度と

もゝめ夜の泊と引向屋場ニハ人馬の掛引あげ〳〵馬夫雲助の

声高ニ罵ルゝ駅路の風ヨリて備ニ地方繁昌とゝ〳〵

偖亦長茱萸の糟漬ハ當所の名物ヨリて世ニ守口醤と号ス

風味殊更ニ美ヨリ因云此長茱萸ハ生る時ハ宮前茱萸と号し

往昔ハ攝州天満天神の宮前いまゝ田園ヨリし時作て生ヨリ〳〵と

ヨリ〳〵宮前の号ヨリ然ヨリ小治元年ヨリ此ヒ漸ニ地ヒヨリけて

今ハ宮前いヨリも更ヨリ宮後も數十町人家とヨリ此大根も當時ハ

長柄の辺ヨリ作ヨリ知れども尚旧名と用ヒ〳〵宮前茱萸と称ス

余有と此守にて求めて糟藏に製して守に渡す

○南十番　守口の上にあり陸路の街道に当村の傍と

下嶋渡口　南十番村の上にあり河州茨田郡下島村より摂州西成郡辻堂村へ淀川を船にて渡る辻堂の渡しと云長さ百八十五間と云

○下嶋　或は十一番とも号し今市より是まで水上九丈九丁許なり

○北十番　下島村の上にあり

○九番　北十番村の上にあり

三社權現祠　下嶋と八番との堺にあり此辺の生土神なり

○八番　九番村の上にあり陸路の街道なり

一津屋渡口　八番村の岸にあり摂州島下郡一ツ屋村より河州茨田郡八番村へ淀川を船にて渡る渡の長さ三百三十間と云

○七番　右渡場の上にあり陸路の京街道なり

○六番は街道の外にあり

白山權現祠　六番村にあり相殿に春日明神と祭る当村および三番四番ホの

○五番　七番村の上にあり街道の順路へ

○二番　五番村の上にあり街道の順路なり

四番三番は街道の外にあり

津嶋部神社　延喜式に出金田村にあり嘉祥三年十一月従五位下と授く

当村は街道の外なり一番二番両村より通路あり

○一番　二番村の上にあり世に佐太と云此辺村一番より十番までの村名にて一説に大坂金城要害の軍勢隊伍と立る名なりそ下島より水上九三十五丁許

佐太天満宮　一番村にあり此地の生土神なり

本社祭神菅大臣　御神体木像長二尺許御自作と云

例祭六月十五日九月廿日本社額佐太天満大自在天神　二品親王良尚御筆なり

好文天神祠　本社の傍にあり

白太夫祠　好文祠の傍にあり

末社　稲荷　愛宕　手水鉢　井筒　淀屋橋八太郎吉朗なり

勅梅　社前にあり後水尾帝より二枝の梅と賜ふ当社の神木に接木する所

又御製の和歌と賜る　後水尾院御製

家の風世々に伝へて神垣や千とせを経とは咲く梅も白妙

佐太天満宮

ちとせの松はさかりの
春つかれに
見るさくらかな

扁舟競渡賈
游皇都山
郭水邨景
各殊精細
看來入佳
境清明畫
出上河圖

菊井公廉

竹内御門主良尚親王御副書曰

河州佐太宮ハ菅神の廟なりもれども近代社あ絶たて

祭奠の儀式も雖ども永井信州左守尚政朝臣再興せ〜ふ

より壮麗目ぬ奪ひ見る者ハそ〜聽をのハのぎむ其須

太上天皇百和香ヨ梅の折枝とそ〜尚政朝臣ヨ給ひ〜と外の

庭ヨ瑞籬のうへ物ヨこれヨ依〜右の御製と尚政

朝臣ヨぐ〜給ふ即納之内庫の寶物とすぬ物の景ふこれふ

かゆんされば神の徳ひよ〜そ〜かれが清ひとい〜あ〜ら〜

ものう彼御製の由来とか紀ぶ〜べ紀ふ〜ま〜ま〜ま〜て止る

事こ〜ぞ〜い〜〜〜ち〜〜ぶ〜の強〜〜

慶安元年　大呂念五

北野寺勢二品親王良尚書之

抑當社の勧請ハ年歴久遠〜て其盛觴さぞがるべ漸永德年

中の社記と存ぶ厥后荒蕪〜〜社頭も神さび瑞籬もぐ〜〜ろ

る〜紀慶安元年當境守屋城州淀城主永井信濃守尚政矣

菅神と尊崇〜て再び社檀と新ら営ま〜其ふ神威のちぎ〜く

して社頭玲瓏たり其頃　太上天皇（後水尾帝）名香より二枝の梅と副て
御寄附ある時より卯月の末つかたふ社前の梅より二本の枝と
接しぶ勅のかゝれるや神徳のそなさるや奇矣る哉二枝ともに焼
然と栄ん時なれば花咲実と結びたり大君の御恵と御製の御
威潤して彼も梅ももろ為有しやと四方の人くられと拜して感涙臍
を絞じ社頭より群とあせり原来此地は都往返の官道なれば旅客常た
絶ず淀河の流れして上下の船昼夜とめり　往あひ
船中より鳥居の整くとと見るより遥拜して行くるもなりけ

守口より此辺まで陸路行程一里なり

菅相寺　佐太宮の後より天満宮奥院と号ス禅宗曹洞派正保元年建立　本尊十一面観世音　行基作　長三尺　薬師佛　運慶の作

秋兼祠　本堂の傍なり　連歌所　同上　永井尚庸虔碑　寺前にあり　儒官崔山野節撰

紫雲山来迎寺　右同所に隣る大念佛宗鎮西派　本尊天華阿弥陀佛　服檀の左座像阿弥陀佛右ハ閑山識門上人の像後ハ村上帝の版依なり　観音堂　十一面尊と安置　鎮守祠　八幡大神　星江相摸大明神稲荷ホとなる

夫當山本尊の来由と傳聞る摂州深江里る法明上人と聖なり
山州雄徳山八幡宮る詣して融通念佛宗弘通と祈るひしに康
永元年六月廿三日夜石清水別當善法寺る神勅なり曰我此山る善跡

三嶋江渡口

忠秋

力丸

三嶋江

して和光の塵を埃ぐるといへども時機いまだ至らざれば空く五百餘歳を
過せり大安寺行教法師を傳て天竺の佛像今勅封して寶庫に
あり當時正に時機ならざれば早く勅封と解く汝より深く法明
法師に授くべしと霊告ありたるれば別當此よりと奏聞しき
同年七月十五日宝庫をひらき法明上人に授与しそれより此本尊を
融通念佛宗の本尊として遍く海内に弘通しる今の本尊
これなり
拾別平野郷中大念佛寺の本尊石清水八幡宮より法明上人に授けたる
よし縁起も大略如此なり又信貴の少濱村の源光寺の本尊も天竺にて
法明上人授けたるとかや其是非とも定がたし又和泉国泉南郡にも天竺の仏像ありて
其辺六十ケ村月々巡番に詣り毎月法會を勤ひとなり

仁和寺渡口　一番村の上にあり拾別仁和寺村より拾別島下郡島飼の下村へ渡る
船賃一人より水上九三百三十間と云
○仁和寺　右渡口場の一村なり寺にあるゆへ仁和寺村とよべり
いにしへ仁和寺の領地にて今も有り
○點野　仁和寺村の上にあり一名白波川と云　大供水にて當村の堤破壞
根並八箇に溢るゝと點野切と云
○太間　點野村の上にあり日本紀に見えたる移子絶間の旧趾なり又大木集に出たる
絶間の地も此地なり今は水入れて田圃となれり
○木屋　太間村の上にあり佐大より西へ
○松が鼻　木屋村の上にあり水上九三十四丁ときこゆ
三嶋江渡口　松ヶ鼻村の上にあり拾別島上郡三嶋江村より此間へ淀川と云
舟渡にて渡り出口の所にもいふ水上三百十間ときこゆ
○出口　松ヶ鼻の上に第一別にあり村の堤より遍路内にあり村中に光善寺ときこゆ
一向宗の寺にあり極楽堂と号す東六條に属す
蹉跎山天満宮　出口村の隣村中振にあり中振出口両村の生土神ときこゆ
例祭九月九日

本社祭神菅大臣　神像長四尺許　行者堂　稲荷祠　神樂所　共に社頭に

社傳云御自作

観音堂　鳥居の傍にあり聖観音と安置聖徳太子御作并に弥勒佛不動尊と

安置とあり慈上人の作なり　社後龍光寺　観音堂の傍にあり

釈迦仏聖徳太子御作縁起あり　略之

社傳云昌泰四年　菅公流罪に遷しまゐる

時御息女　菅公須广御記　御父の別れを哀しみて此所を通り蹉跎し

かりや姫とあり

給へ古跡よりて蹉跎山と号ス　文選に蹉跎と訓ず　唐詩の注に失足

貌あるハ足どりスベリ越と訓ず

後に御自作の神像を此に祭り崇敬し奉る所なり

意賀美神社　伊加賀村にあり延喜式に出

例祭九月九日

○伊加賀　出口村の　伊加賀川　伊加賀橋　もに村にあり

伊加賀

東堤　村より上り

船の水まで上りて　枝方

まで廿丁ばかり引上り

それより十四五丁

上りて　堤へ上る　大塚の

下より上りて三丁ばかり引

上る　長尾川より

船のぼり　六丁ばかりの

鴨橋より上りて　蔵

上り　橋どのまでゆく

其二
牧方駅泥町

土人賣食
盪瓜皮朝
罵募銭何
所欺猟悪
不嫌如爵
蠟恰供支
滕倦眠時

嶋椋隠

人の尻る
口車そゝれ
洞ゐふ
のり合の舟

江戸
平秩東作

其三

其四

牧方渡口

西岸大塚へ渡る

百里河堤
西又東蓬
窓夢破蘆
荻風暮々
嘲客鬻蒹
餅不以滄
浪鼓粧翁

技方驛

伊加賀村より宿口の駅より當駅まで陸路行程二里
松ヶ鼻より此驛まで水上凡三十町ばかり

此驛は京師浪花の通路の人西国の諸侯方関東参勤の官道なるゆへ給舎本陳茶店貨食家多く將級盛の女多ければ昼夜とゝに賑しく驛中泥町三矢岡新町等の小名ありて町続き頗る長く駅の繁昌より又両六條の市場も有り東は願生坊といひ西は淨念寺といひ諸人常に間断なし貨食船は當所の名物にて秋とも昼夜さやうなる船に級酒汁候なんと貯へ上下りの通船と目がけて鑿ゆの物と其船に打うけ荒らうみ名引あけ眠うもゆる船宮と起しく声かまびすしく酒食と高ふ笑ふられと唱ふる船と号し往来の船より風波の難ひを吟味此あく漕つれ出る夫と助ける役あり

啖ふ蚊とらうんうつ起されてゆるる寄の淀の川舟　作者不知

酒うりの美やづれくおぼつか　梅圃

ひるとよ著ろくる宮うれ　佑穂

ひるかくの磯も寄り帰り　燈外

御茶屋　枚方の中にあり天正の頃豊太閤此地に茶屋を建させ給ふ

牛頭天王祠　同所にあり此町にあり祭るの生土神なり例祭六月朔日　九月九日

長松山萬年寺　右天王の社頭にあり　本尊十一面観世音　春日作　座像　長八寸

真言宗

薬師堂　本尊瑠璃光佛　弘法大師作　行者堂　観音堂の傍にあり　長三寸八分

枚小角を安置す

此地に往昔惟喬親王猪狩し給ひ鷹を放ち給へるに鷹の大樹の枝にとまり巣を営んで雛を生ぶ

親王驚怪あつて時に祈誓し給ひ所持給ふ長松山と号し其鷹飛去れば此山に霊験顕著なりしかるに鷹

塚山も号し又蔵が谷に移せり　履中天皇の官庫の古蹟なりと言傳へり尚本尊大悲尊像の来由薬師佛牛頭天王の

縁起あれども事繁きゆえ略す

枚方渡口　此地より対岸島上郡大塚村に渡す　三矢の里より云治の長九二百八十間なり

監船所　枚方の駅にあり淀川の船を監す　京師角倉氏累世これを司治

天川　枚方の駅中泥町　三矢岡新町をとおく人家の端にあり交野郡に属す　水源

河内南田原星の森より出る枚方入口にて近水上九十二町

天川芝に流れ入る頃交野のうち五月雨の頃　為家

天の川のひと夜の契りぐふかの里の苔や鳴らん　家隆

○禁野　天の川の岸にあり　往昔延暦年中　帝ここに遊猟　そこ国民牧を禽獣を
驅ること禁じ故に禁野とこゝに今村の名これ
車塚　禁野村にあり　惟喬親王御車とこゝに
のこれるこゝ古墳なるべし
和田寺　禁野村にあり　医王山佛陀院と号し真言宗　開基弘法大師
俗に禁野の薬師とこゝに婦人産を祈れば霊應あり
本尊薬師佛　聖徳太子御作長三尺ばかり脇士不動　此尊像そこ　あり摂州
昆沙門天ともに弘法大師の作と云
四天王寺に在せしと弘法大師ここに近しこゝに其後貞観年中
文徳天皇第一の皇子惟喬親王　清和帝の御兄
ここに遊猟の時三足の雉
波斯院に飛入る故に即ここれを塚に築きここに小祠を建て給ふ
今の鎮守これなり其後康永の比廃絶ここに楠黛和田新発意

源秀再興の比和田寺と改む什宝の大師の像の両界曼荼羅
あり寺前に御猟の楔あり　そこの樹にそこに拾朽ここ
禁野　中宮片鉾ホ徳名なり　帝御猟の所なるべし所野ここ
交野原　或は三野とも書
あこれは交野のこゝかゝる衣ぬれぬやどりに人しこれば　業平在
新古
ちはやふる交野のこゝ猟ぶと昔の雪ちるまでの嘆　良成
○礒嶋　禁野村の上にあり　此一村は若狭ノ国上郡に属し　もはこゝ西の岸　摂州に
づれこゝ淀川の流れ　こゝ淀の方へ　こゝ
○渚　礒嶋の上にあり　村中にこゝ
陸路御道の順路なり
渚村にあり　惟喬親王遊猟の時こゝに頓宮とこゝ
波斯院古蹟　今寺とこゝ　こゝ十一面観世音こゝ　真言宗の僧こゝ

堂宇五十五年[illegible]寛文元年十一月山列浪
城主永井侯の舎弟同伊賀守家臣松井吉通建之銘ハ向陽林子撰ス

土佐記　貫之土佐の任[illegible]の院の梅の花[illegible]

君恋[illegible]宿の梅花むかしの香ゝ[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]の色のいろにもれぬかゝ[illegible]や渚の宿こゝ[illegible]　俊成

渚社　法の院の林と　渚岡　法の院の東といふなり

[illegible]

[illegible]入[illegible]の渚の社の[illegible]　内大臣

[illegible]小渚の五の[illegible]　信明朝臣

坂川　渚村の上にあり水源穂谷より出ずるなり穂谷川ともいふ末坂村にて
渚川に入るなり坂川ともいふ

○坂　川の辺にあり天の川より此迄水上九町三丁余

交野神社　坂村にあり近邑八ヶ村の生土神なり例祭九月六日此地浪華の艮に
あたるを以て鬼門除の社に移ス

本社祭神牛頭天王　土人河内国一之宮と称ス　本地堂　本社の左傍にあり本尊帝釈天
[illegible]四天王　地蔵[illegible]安ス

一宮神祠碑　寛文丁巳之春　菅原朝臣長親　篆額　前祠祝岡田阜撰
伏見岡田宗興建　江戸海保皐鶴書　銘文畧之

○下嶋　坂村の上にあり　下嶋渡口　下島より[illegible]殿村に渡る

○上嶋　下船村の上にあり

船橋川　上船村の端にあり水源荒坂の嶺の南より出ず招提村を歴て船橋村
より渚川に入坂川より此所まで水上凡十八丁九六間ありと

楠葉渡口

淀の泡

くまて[illegible]

淀く

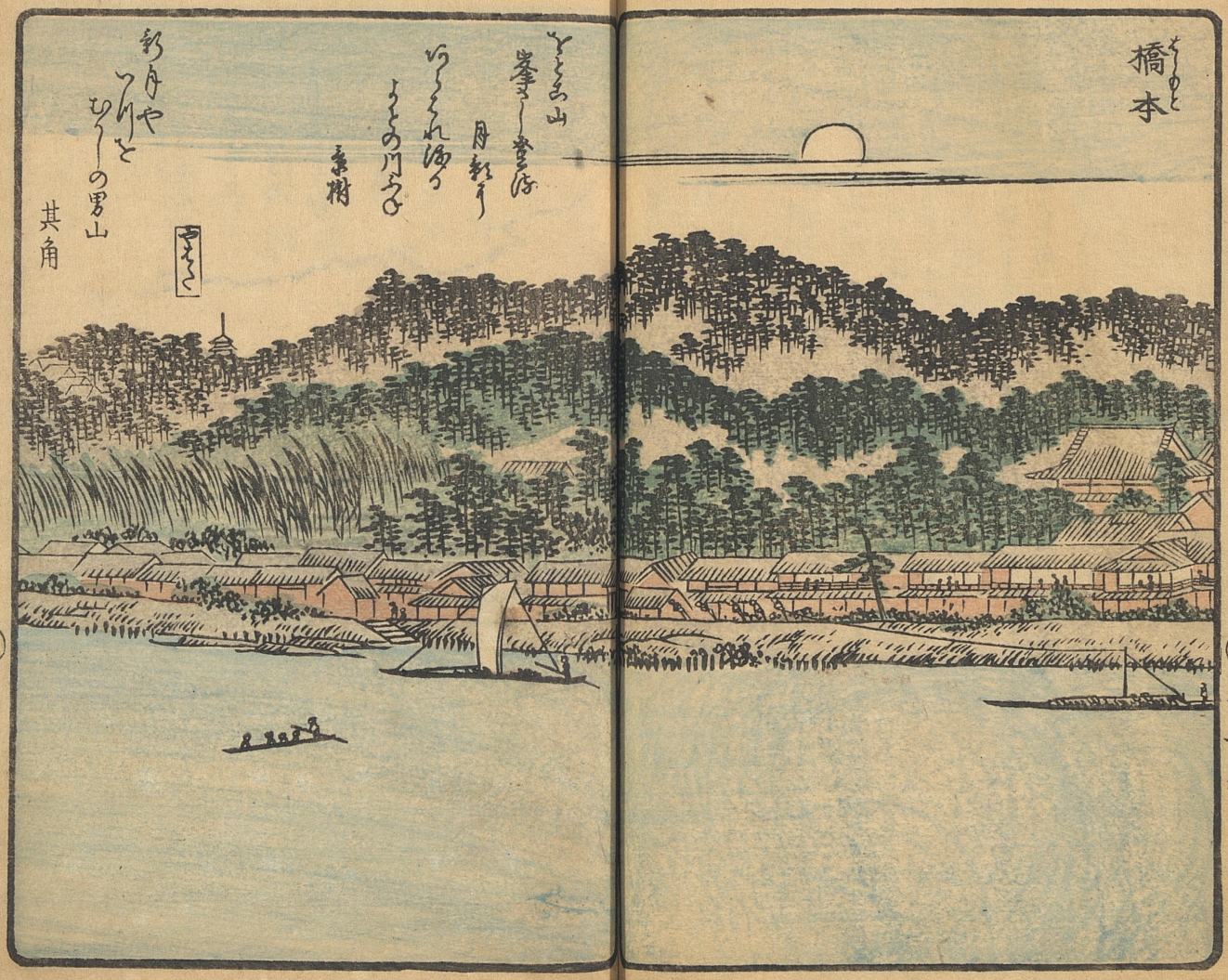
四千石

宇鹿

往昔此川水勢つよくして橋を架しがたく渡りしかよう舟橋を
つくり往来せしゆえ船橋川といえり　今街道より内へ入る舟橋村となるあり
あれや此宮ゆえ波あらぬ天の川交野辺ゆけば渡る舟橋　光俊

○樋之上　右川の傍にあり南村の東に舟橋村あり二の宮と称する神祠あり
辺縁　この村の生土神にて例祭九月九日
○楠葉　樋の上の上にあり拾遺より此所まで陸路行程二里続日本紀云
元明天皇四年正月始置楠葉驛　もしれば往古此所歟
なるべし南村中より男山八幡宮へ参詣のためあり又のちに此辺りを楠葉
野といふ又楠葉宮といふる行宮なりしよし日本紀に見へたり
続古　旱ちしに分酒をうえの続かげをうる楠葉の夏の秋の月　関白左大臣
楠葉渡口　月西にあり摂州島上郡高槻に渡れば又淀の渡しと云
淀川の舟渡しにて渡の長百七十間ばかり

彌勒寺古趾　楠葉村にあり一名足立寺ともいふ
山別八幡の古祀に見へたり
釋迦堂　月村にあり一名久修園院と号ス本尊釈迦佛立像長六尺
赤瓶櫃ともいふ
藤原滋麿別荘趾　月村にあり字を茂原と号ス傳云桓武天皇交野に行幸の時
此別荘を行宮にしたまふ
金川　月村の北の際にあり船橋川より此所まで水上凡三十二丁余
此川河内　山城両國の境ニ
金橋　右金川にかかる橋にて郡の号
北詰より山別淀喜郡なり
廣瀬渡口　金橋の上にあり拾別当上郡廣瀬にあり渡の長さ
凡九十間にて俗に下の渡しと別に上の渡しあり
橋本驛　金橋の上にあり大坂街道の駅にして人家の地十二丁あり茶屋旅舎
八幡宮の参詣の人この所にて上下す
此地は往古山崎より架し大橋あつて其橋の詰なるゆえに橋本と


橋本
峯の山
月新
月新や
男山
其角

其二

八幡山落日

波多野出雲

作

人やなうしむ

古佛

八幡山

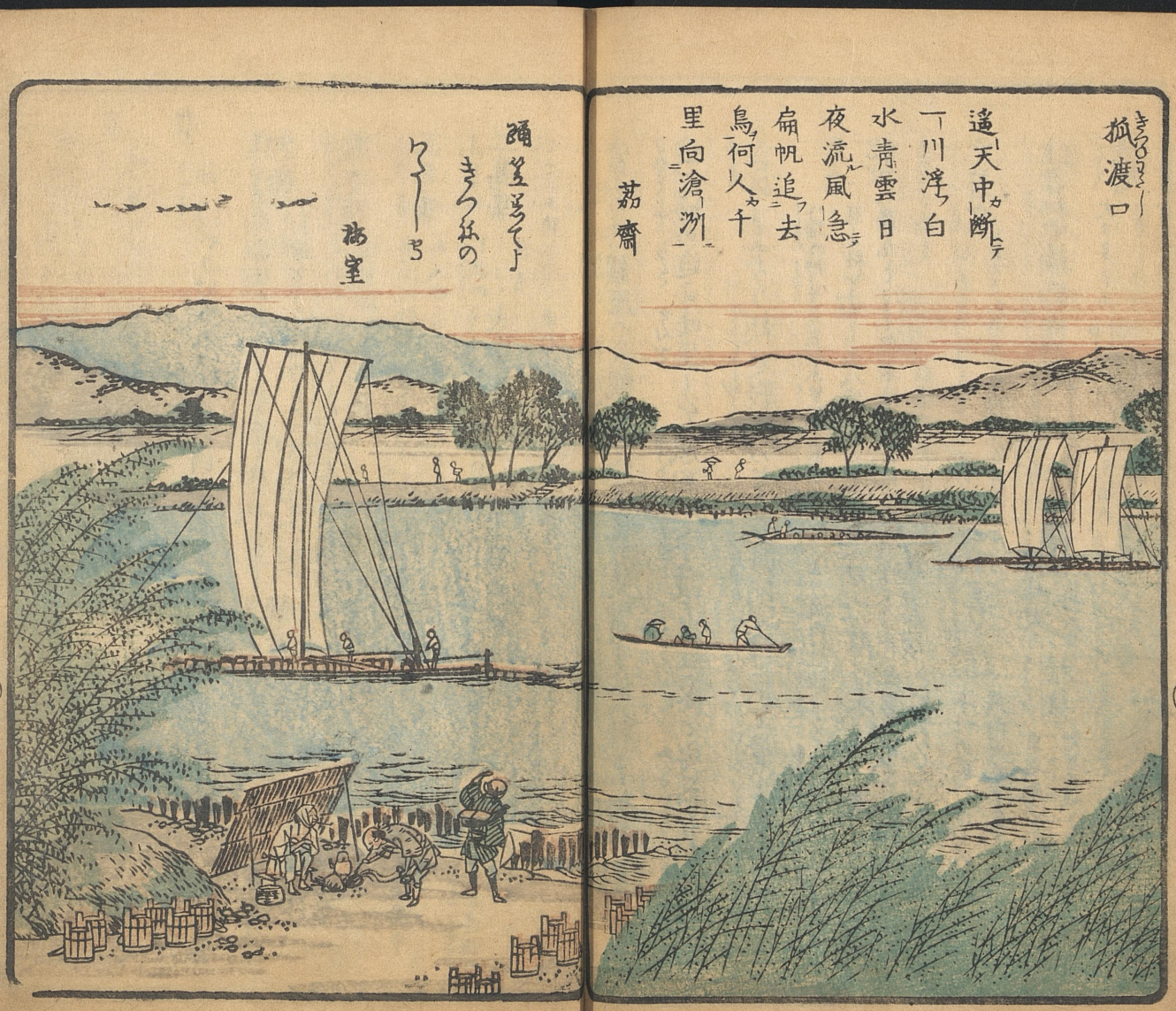
尚白

神滸落々匹練
清両山爲影嶺
新晴移帰未叶
春將老但誦警
詞爲古情

嶋椶隱

号くとぞ今中之町とゝる江橋の渡にあり　山崎橋延喜式にみえ
文徳実録に出さり今は船ばかりとなる
橋本渡口　右岸にあり　傳に別淀川と山崎とを分る又一説に山崎の橋のこと
駅中の右の方に石壇鳥居あり山路十余町中程に狩尾の社と地主の社
雄徳山泰詣道　あり八幡宮鎮座以前より在しかの傳ふ
○樋之上　橋本の町をゝれとゝ名物の小豆餅を
石清水正八幡宮　山城綴喜郡男山鳩嶺に鎮座まします雄徳山と書く又嶺と香呂峯と
称ス山下に民家十四町あり高家多く此辺の都会の地なり
本社三座　中央誉田天皇　又應神天皇と称ス人王十四代仲哀天皇第四の太子
東之間　玉依姫　鸕鷀草葺不合尊の姫にして神武天皇の御母なり　西之間　神功皇后　應神天皇の
御母なり

當山の御鎮座は貞観二年六月十日筑紫宇佐八幡宮御託宣にて
我王城の近に迁坐して鳳凰と守護し國家を安泰なるべしと
言ひしより朝廷歓悦ぜるゆ此地に神殿を営み永崇敬なり
八幡の神号は筑紫宇佐峰験の松の下に八流の雲降下る赤幡四流白幡四流則其
形に社を建て正八幡宮と崇めまつる云又一説に和氣清麿に流してこれを
誉田八幡丸と　若宮　本社の後の傍にあり　姫若宮
名のりたまふ　仁德天皇と称ス
水若宮　姫若宮の傍にあり宇治の皇子と　上高良社　本社の後の傍にあり
称ス仁德帝の御弟なり　武内大臣と称ス
住吉社宝蔵影向櫻　廻廊の神殿の　楠樹　前に有　楠樹　東廻廊の外にあり
大塔　大日如来の　阿彌陀堂　大塔の傍に有　元三大師堂　三の丸の内にあり　神輿舎　は向に
二ツと安ス



孤渡口

遥天中ニ断テ
一川浮ル白
水青雲日
夜流風急ニ
扁帆追フ去
鳥何人カ千
里向滄洲

荔齋

踊笠ヲ
きろ紙の
ろ〜ろ

梅室

琴塔 興廊の外東にあり見沙門天を安置 石清水 琴塔の下にあり後に石清水を移す

絵

松もあひ又も苺ひを石清水汐まさ〳〵つゝまつゝん 貫之

勅

神垣やうゑもをよる石清水をみんちゝせのまぞゝ 為家

細橋 別宮社の下にあり布て橋の形とす〳〵 観音堂薬師堂 きのの

瀧本坊 石清水の坊なり 松尾堂 愛染堂 三の丸の 岡山堂 同向

三鳥居 元三大師堂の東にあり 石挂鐙 正保二年正月従四位下行信濃守

大江姓永井尚政建之

二鳥居 七曲の 太子堂 七曲の上 下高良社 二の丸の後方にあり 藤大臣連保を

蔡に有 下流の西顕を以て奉行す 都人正月十五日より十九日まで

疫神堂 一の丸の内にあり 疫神堂 高山八幡宮の社の東の

土民時疫の厄日剪竹破魔弓毛鑓を求て邪鬼を逐ひ世俗これを御子まつりと

本地堂 疫神堂に隣る本尊弥陀佛脇士観音勢至

堂前の鐵燈臺 一鳥居 疫神堂の後門外にあり八幡宮の額の佐理の

豊臣秀頼公の御寄附なり 華なり後世旧蹟なり 松花堂 これを

猶に 放生川 八月十六日放生会行なる 高橋 安居橋 南の

宿院 仏手の間にあり大乗院と号し本尊千手観音 神殿 神功皇后

神宮寺 なる方又は愛染明王と号し開基は真聖菩薩

放生會 例年八月十五日下院より神幸あり同日還幸し給ふ

十六日より放生川の所へ社僧等諸の魚を放ちのこる程に此

両日は遠近より詣人群集し宿院の辺は芝居放下師猿の

物真似し天地もうゝ市とうたい俗は神慮のあぐゝうゝ

岡崎藏書

男山秋のうしの年うるうの月の日より始まる　知家

臨時祭例年三月中午日より

ちりもぜず家を移るうしの大夫人のかぐれうしん　定家

○科手　京都の外にて　若宮八幡宮　科手村

八幡宮御参向道の右居の後より此所に移る　山城の郡

渡口　明寺村に渡る淀川の西の岸

一説に山城の橋の　桓武帝延暦三年に是と造る中頃より

淀の橋とかけてより此橋絶てより久しく知られとなりて新淀と云

往古の人家は南に移りて今橋の南に見なすと云